

旅日記にみる近世末期の女性の旅

山本志乃

「旅の大衆化」への位置づけをめぐる一考察

Travel of Women in the Late Early Modern Period Observed in Travel Diaries : A Study on Its Positioning Relative to the "Popularization of Traveling"
YAMAMOTO Shino

はじめに

- ① 清河八郎著『西遊草』にみる抜け参りとその実態
- ② 中村いと著『伊勢詣の日記』にみる旅と遊興
- ③ 松尾多勢子著『旅のなくさ、都のつと』にみる旅と思想
おわりに―旅する主体としての女性

【論文要旨】

旅の大衆化が進んだ江戸時代の後期、主体的に旅を楽しむ女性が多く存在したことは、近年とくに旅日記や絵画資料などの分析から明らかになってきた。しかしながら、講の代参記録のような普遍化した史料には女性の旅の実態が反映されないことから、江戸時代の女性の旅を体系的に理解することは難しいのが現状である。本稿では、個人的な旅日記を題材に、そこに記された女性の旅の実態を通して、旅を支えたしくみを考える。題材とした旅日記は、①清河八郎著『西遊草』、②中村いと著『伊勢詣の日記』、③松尾多勢子著『旅のなくさ、都のつと』の3点である。

①は幕末の尊攘派志士として知られる清河八郎が、母を伴って無手形の伊勢参宮をした記録である。そこには、非合法的な関所抜けがあらさまに行われ、それが一種の街道稼ぎにもなっていた事実が記されており、伊勢参宮を契機とした周遊の旅の普及にとまない、女性の抜け参りが慣例化していた実態が示されている。②は江戸の裕福

な商家の妻が知人一家とともに伊勢参宮をした際の日記で、とくに古市遊廓での伊勢音頭見物の記録からは、旅における女性の遊興と、その背景にある確かな経済力を確認することができる。③は、幕末期に平田国学の門下となった信州伊那の豪農松尾家の妻多勢子が、動乱の最中にあつた京都へ旅をし、約半年にわたって滞在した記録である。特異な例ではあるが、身につけた教養をひとつの道具として、旅先の見知らぬ土地で自ら人脈を築き、その人脈を故郷の人々の利用に供したことは注目に値する。

女性の旅人の存在は、街道や宿場のあり方にさまざまな影響を及ぼしたと思われる。とくに、後年イギリスの女性旅行家イザベラ・バードが明記した日本の街道の安全性は、女性の旅とは不可分の関係にあり、江戸時代後期の日本の旅文化を再評価するうえで、今後さらに女性の旅の検証を重ねていくことが必要である。

【キーワード】近世女性の旅、旅日記、抜け参り、伊勢音頭、松尾多勢子